自由奔放少年記

露木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
自由奔放少年記

【Ｎコード】
Ｎ４６３５Ｓ

【作者名】
露木

【あらすじ】
「ある日から私の人生は変わった」……そんな女性口調な少年が、異世界で生きようと頑張って行く話……　少しずつチートです。そして少しハーレムです。

異世界だそうです（前書き）

書きたくなったから書くだけ・・・更新は気が向いたらです
それでは嫌な方は早めにお帰りをお出口は右上です

異世界だそうです

・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「うん……ここどこですか？」

人間の三割の時間が消費される睡眠から目が覚め、夏なのにやけに寒いなと思いながら、まだ半開きの目で辺りを見回すと、辺り一面が真っ白で、何か冷たい物が首元に当たったりしていた。

「冷たいですね……」

覚醒した頭で今の現状を考えるが、一向に思い当たらなかった。記憶が少し抜け落ちているのか、直前の事を覚えていない。それでもこれだけは言える。

断じてこんな寒い、ましてや雪が降っている雪原ではない。

「何故ですか……」

突然の事に頭を悩ましながらも、この十四年間働き続けた頭でこれからどうすれば良いかを、ひたすら考えてみたがまだ幼き頭脳なようで、全く思いつかず三分程度で諦めた。

「それよりも寒いですね」

落ち着きながら独り言を言っていますが、何時間もこの雪原に……まあ目が覚めてからは数十分と言う短い時間ですが、薄い長袖の服に長めの薄いジーンズという薄着でいた為なのか、その所為で意識が朦朧としてきた。もう自分の現状に泣きたい位ですよ……

そんな風に鬱になっていると、どこからか耳を劈くような醜悪な声が聞こえ、その音がする方へと目を向けると、ゲーム的に言うならオーガなる、取り敢えず便宜上魔物（モンスター）とでも呼んでおきましょうか。

それがたった一匹でもう突進しながら、こちらにやってくる。

こちらに敵意を持っているのか、棍棒を振り上げながら地鳴りの音と共に。

「だるいですねぇ……」

逃げようと試みたが、痺れたのと、寒すぎて麻痺をしたのか足が全く動かず、もう面倒だと思い死を受け入れて待つように、そのままの体制の仰向けの状態で居ることにした。

遂に魔物は目の前までやってきた。少しばかり恐怖を感じながら、目を瞑った。

目の前の魔物は棍棒を振り上げた筈だが、何故か何時まで経っても振り上げられた棍棒は来なく、その代わりに……

またもや耳を劈くような醜悪な音声が聞こえたかと思い、目を開いたら、次には真っ赤な血しぶきが返って来た。

そして私の目の前には――

「大丈夫？君？」

可愛い女性が……等身大の剣を持って私の目の前に佇んでいた。

……

参りました。今回のウェイス２０頭討伐のクエストでしたが、普段集団で行動しない筈が、何故か今回に限って集団でいたためにしくじってしまい、残り一匹の所で取り逃がすなんて事をしてしまいました。

しかも最悪なことに、奴が向かった先には……少年か少女のような小さい子供が居てしまいました。

普段の私なら、そのまま見過ごすなんて選択もありましたが……

私は思わず魔力を半分も使う瞬間移動の魔法を使って移動をして突き進んだ。

……

さて、この状況はなんでしょうか？

「君、大丈夫？」

「大丈夫ですよ？」

その女性はまず心配そうに私の安否を確認してきたので、寒い事は言わず、大丈夫だということを伝えました。次に女性は少し気まずそうな顔をして……

「あのね。まず君に二つ言っておきたい事があるの。実はさっき来たオーガ何だけど、あれ、私のせいなんだよね」

「はぁ……」

何となく納得したかの様に言葉を搾り出しましたが、言ってる意味がよく分かりませんでした。

その事が分かったのか女性はさらに丁寧に説明をしてくれた。

「えっと……実は今の奴だけ狩り損ねちゃってさ」

「ああ、そういう事ですか……」

ようやく、まだ少しだけれど一応理解できたので、それなりの返答をしておく。

「まあそれは置いといて」

今凄く不本意なことを言われた気がしたので、私の最大限の冷たい目をする。

「ちょっ……ごめんって、悪かったからそんな目で見ないでよ」

「まあいいですけど」

少し信用し辛くなりましたが、それは黙っておきましょう。

「こほんっ、で？君は何でこんな所に居たのかな？ここはレベル三十台が推奨されてる雪原何だけど？」

「レベル……？」

一瞬よく理解できない単語が出てきたのでつい口を滑らせてしまう。

「はあ……？レベルを知らないって、まさか君、記憶喪失？」

女性の言い方を聞く限り、レベルの存在は当たり前だと分かった。それに反論して、私が知るかよと言いそうのなってしまうが、口を噤む事にする。それよりも気になった事があったので、それには反論をしておく事にする

「私は君って名前じゃありません。黒徹です水無月黒徹（ミナズキコテツ）です」

「うん？みなずき？随分変わった名前だね？」

良く分からない質問だったので聞き返しそうになるが、瞬時に頭で、多分逆にこの場所では言うんだろうなと理解して改めていうことにした。

「えーっと……コテツ、コテツミナズキです」

「ふーんコテツね。私は……メリスでいいよ」

言い方が戸惑っていたので、偽名だと思うけど深くは追求しないことにした

「じゃあメリーさんって言わせて貰いますね。質問ですが、レベルって何ですか？」

「メリーって、まあ別に構わないけど……まさか本当に記憶が無いの？コテツ」

「はい、何故か気づいたらここに居て・・」

取り合えず怪しまれたら今は困ると思い、話合わせをしておく事にしましょう。

「う～ん、じゃあ名前以外は何も分からないの？」

「はい……」

先ほどから話していたけど、だんだん寒さが無視できなくなってきました……

「特に外傷もなさそうだし……というか、コテツ随分変わった服……」

なにやら私の服におかしな所が在った様で、メリーさんはとても驚いていた。

「どうかしましたか？」

と言ったらいきなりメリーさんが着ていた黒いコートみたいなのを被せられた。

「取り敢えず話は街に帰ってからね？」

そしてメリーさんにいきなり持ち上げられた……お姫様抱っこで。流石に恥ずかしくなって、顔は真っ赤になっているでしょうから、それを隠すように話しかけた。

「何でです・・・？」

「この雪原の温度を舐めない方がいいよ？普通にそんな薄着で居たら風邪引くに決まっているでしょう？」

そういえばさっきから視界が朦朧と……

「取り敢えず寝ときなさい。《スリープ》」

「あ……う……」

何やら眠気が急激に襲ってきて、目を瞑った。その前に見えたのは、とても心配の目をした、メリーさんだった。

状況説明とこれからだそうです

「じゃあこれは何か分かる？」

現在私はメリーさんに、この世界の説明をしてもらっている訳ですが……

「何が書いてあるんですか？」

文字さえ読むことが困難だった。私の許容範囲は日本語と、英語と、フランス語だけです。

「記憶喪失だけで済む事じゃ無くなって来たわね……」

少しメリーさんに申し訳無い気持ちになるが、私にとって異世界なのですから、仕方ないじゃないですか。そんな風に内心思ったり。

「そういえばコテツはレベルも分からないんだっけ」

あの時メリーさんは若干呆れた様に話していましたが、今回は真面目な顔をして質問をしてきたので私は返答をしかねた。その事をメリーさんは神妙に受け取ったのか、メリーさんは出来る限り分かりやすく丁寧に、まるで子供に教えるかのように、レベルに関する事を教えてくれた。

まず、レベルは私の知っているような、単純に高いほど強いという意識ではないらしく。

人を当て嵌めて言うならば、どれ位人のために尽くしているか、どれ位知識を持っているのか、どれ位信用されているのか、そこら

辺が小さくともプラスとして影響しているらしい。らしいと言うのは、基準がどれ位か誰も理解していないから。レベルを知るためにはギルドへ行き、白い服装のギルドの方に話しかければ教えてもらえるそうです。けれどこれが一番この世界で問題になっているそうです。

ギルドの方にではなく、個々のギルドでだそうです。この世界にはレベルを知れるギルドが六つあるのですが、場所によってレベルが以上に低くなったり、以上に高くなったりするそうです。

理由はその場所……大陸が分かれているのですが、その大陸での見解が違う所為でこんな事が起きてしまっているそうです。

話が少し変わりますが、レベルは逆に、行いによって下がる事もあり、人を殺せばレベルが一下がるそうです。でもそれは悪人の場合は下がらない……その基準も問題らしいですが、それは置いといて、実はレベルはマイナス状態もあるそうで、マイナス状態は、人を殺したり、一年間の間で何もしないと下がるそうです。　赤ん坊はどうなるのかと疑問に思ったら、それは生きているだけでプラスになり、五歳になるまではそれが適応され、そこからは肩叩きだけでもプラスになるので大丈夫らしいです。

なのでレベルがマイナスなのは、人殺しの証拠と公認になるそうですが。

話を戻して、ギルドではそれぞれレベルが違うのですが、以上に低くなるというのは、マイナスにもなるそうで、人殺しに勘違いされることもあり、それが問題になっている。

ここまでがレベルに関しての、一般常識だそうです。

「本当にコテツは何も知らないんだね」

「記憶喪失ですから」

もうこれは免罪符になってもいいような……

「けどその言葉控えたほうがいいよ」

「え？」

まるで心を見透かされたように言われ、一瞬驚きましたが、理由があって、この世界は剣に魔法、なんだってある世界なので、記憶を蘇らす事位たわいもないことらしく。それどころか記憶を覗くのも簡単な事で……

「まあ特には聞かないけどね」

「ありがとうです……」

とてもメリーさんには感謝しても感謝し切れません。

「でもコテツ、貴方これからどうするつもりなの？」

そうでした。私はメリーさんに会って安心していましたが、いつもでもお世話になっていたら駄目ですし。尚且つ、メリーさんの様にギルドで働こうにも、私は戦闘なんてした事ありませんし。

この世界で生きて行くにも難点ですし、私の居た世界に戻ろうにも方法が分かりませんし。

今思いましたが、私ったらよくこんなに落ち着いていられますね。

そんな風に自分に感心していると、メリーさんがとても素敵な事……

「そんなに悩むんだったら死ねば？」

では無く、残酷なことを言ってくれました。
ですが私の口は良く動くもので。

「あ～それも良いですが、私はまだやる事があるので、万策尽きたら実行しますよ」

今更ながら、私って結構達観していますね、なんて軽く思っていましたら、メリーさんがしまったとでも言うかのような顔から一変、呆れ顔に。どうしてか分からず、私は癖に成りつつある、首を傾げました。その行為にメリーさんは頭を抑え、溜息を。

「コテツ……私が暫く鍛えてあげるから。それまでに実践できるような状態になること。それができないなら後は自分で何とかしなさい。」

「私はナイフと包丁しか使えませんよ？」

これは事実。私は自炊派だったので、包丁捌きは完璧、なはず。ナイフは以前山で遭難したことがあり、その時錆びていたが、偶然落ちていたナイフで命拾いをした。刃物があれば案外生ける物です。その時ナイフの投擲も……熟知できませんでしたが、一般よりも使える筈。ついでに嫌いだった血も完璧に見慣れた。

「私だって暇じゃ無いのよ。コテツに時間を取られる位なら、働いてお金を稼いだほうがましよ」

流石に私でも、今の言葉に苛々したけれど、生き抜くためには、知識やらが必要なのは事実。だから私はこの人を頼らなきゃいけない。いっその事、何処かの主人公のように、フラグを立てて、一緒に冒険して貰えたら。そんなことを心で思っていたり。

「で、どうする訳？やるの？やらないの？三秒以内に答えをだしなさい」

「やります、お願いします」

現実は甘くないなんて周知の事実。だから私は一日でも生きれる様に。高望みするなら、帰れるように。私は決意して……

「なら覚悟しなさい。私の修行はきついわよ？なにせ――――」

「私は一パーセントでも生きる確立があるならそれに掛けます。貴女の修行がきつ過ぎたため、何万人止めていたとしても――――」

けれど、その時の言葉を私は出来れば撤回したい。

「十万人と四百と五百よ」

人の次はエルフに、獣人。いずれも一日足らずで辞めたそうです。それは凄く後から聞いた話。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4635s/

自由奔放少年記

2011年10月7日02時34分発行